



輝き人生

このコーナーではきらりと輝きながら活躍する市民を紹介します。

あったらいいなをカタチに 亀山発 スマートフォンケース

まつば しんいち
松葉 真一さん (川崎町)



伊勢型紙文様を彫刻したジュラルミン削り出しスマートフォンケース(伊勢志摩サミット三重情報館で展示)

「お客様が大切にしているスマートフォンを、落下などの衝撃から守ることを第一に考えています」と話すのは、有限会社ギルドデザイン(能褒野町所在)モバイルプロダクト事業部部長の松葉真一さん(川崎町在住)。約6年前にアルミ削り出しによるスマートフォンケースを開発しました。

その後、耐久性やデザインなどを向上させて生産販売数量を増やし、国内・海外市場へ展開しています。また、今年5月に開催された伊勢志摩サミットでは、三重情報館でこのスマートフォンケースが展示され、三重が誇る先端技術として世界へ発信されました。

一開発のきっかけは？

「何万円もするスマートフォンを落下などで故障させる人が多

かったので、衝撃から守れるケースがあったらいいのになとふと思ったのがきっかけです。そして、会社の従来からの事業であるオートバイ部品製造で培った技術を生かせば製品化できるのではと考え、挑戦してみることにしました。」

一製品化にいたるまでは？

「最初は思い通りにいかず失敗ばかりでした。それでも製品化を後押ししてくれたのは、社員のアイデアの実現を応援してくれる社風でした。会社の終業時間以降は、社内の機械を自由に使える制度があったり、社員同士で技術を教え合える環境があったりしたからこそ、今にいたっていると思います。」

一製品に対するこだわりは？

「強くを第一に、軽く、薄く、格好良くに妥協せず、とことんこだ

わっています。スマートフォンを衝撃による故障から守り、スマートフォンケースを購入していただいた人が、その良さを周りの人に教えたくくなるような製品を今後も作り上げていきたいと考えます。」

一これからは？

「今の事業がいつまでも続くとは考えられないので、1つの事業にしがみつかず、強みを生かした新しい製品の開発も必要だと思います。直近では、デザインが特徴的なアルミ名刺ケースの生産販売を考えており、海外の文具の展示会で出品する予定です。いずれにしても現状に満足せず、時代のニーズに合わせて私も会社も変化し続けていかなければならないと考えます。」



亀山市名誉市民

彫刻家 中村 晋也

作品介绍「ふるさとあい」Vol.5

「風の又三郎」(平成8(1996)年制作)

宮沢賢治の小説「風の又三郎」は、二百十日の風とともに山奥の分教場に現れ、わずか12日で去って行った不思議な転校生の少年の物語です。この像は、その少年が、まさしく現れたかのような臨場感で、物語の舞台となった岩手県種山高原に建っています。「どうどどっ」と吹く風に向かってマントをひるがえし、今にも飛び立とうとする姿は、高原の風景に溶け込んで豊かな詩情を奏でています。「宮沢賢治の精神性の豊かさを、青空を吹く風に託して歌いたいと思った作品です」と中村は語っています。



160cm(高さ)×100cm(幅)×95cm(奥行き)

特別協力 公益財団法人中村晋也美術館(URL <http://www.ne.jp/asahi/musee/nakamura/index.html>)